

欧州視察報告< 9 >

視 察 項 目	音楽のまちづくりの取組み
視 察 日 時	2009年2月6日 (金) 午前10時00分～12時00分
視 察 先 名	国立歌劇場
説 明 者	KEIKO ZWICKL
担 当	山崎 直史

【音楽と芸術の都「ウィーン」】

オーストリアの首都ウィーンは、過去に数多くの音楽家を輩出するとともに、世界最高峰のオーケストラであるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の活動拠点として「音楽の都」の名声を築き上げている。

市内にはモーツァルト、ベートーベン、シューベルト、ヨハン・シュトラウス父子等の所縁の地が残され、静かな観光名所となっている。中でも幼少時より神童として天才ぶりを発揮したモーツァルトが、父や姉とともにシェーンブルン宮殿において、女帝マリア・テレジアの前で演奏した際に、拍手喝采を浴びた話は有名である。

以後、ザルツブルグの宮廷に仕えつつ、欧州全域を旅した若き日のモーツァルトが活動拠点に選んだのは、やはりウィーンであった。

それは、当時からウィーンには優れた音楽家を受け入れる土壌があり、音楽の都として彼らの活躍の舞台が用意されていたものと思われる。



中心市街地のマリア・テレジア像

【ウィーン国立歌劇場】

ミラノのスカラ座、パリのオペラ座と並び欧州三大オペラ歌劇場に数えられる。

市内の劇場の多くはハプスブルグ王朝の社交場として生まれたものの、やがて時代の流れとともに姿を変え、貴族社会と市民社会を隔てる壁を取り払い、現在では庶民の身近な娯楽の一つになっているが、この国立歌劇場もその一つである。

劇場は、リング通りに面したウィーンの中心部に位置し、2人の建築家エドゥアルト・ファン・デア・ニェルとアウグスト・シカート・フォン・シカズブルクによるものである。

ネオ・ルネサンス様式の壮麗な建造物だが、発表当初はそのデザインを批判され、設計者は建物の完成の前に自殺したといわれている。

近隣は世界遺産としてユネスコ指定を受けており、歴史的な街並みが残存しているが、近年、指定地域との隣接地に90mの高層ビル建設計画が持ち上がったものの、建設された場合には世界遺産の指定解除をすとのユネスコからの通告に計画は断念され、従来街並みが温存されている。

ウィーン国立歌劇場は1869年に宮廷歌劇場としてオープンし、モーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」がこけら落としを飾り、1897年から巨匠グスタフ・マーラーが音楽監督に就任する。

1918年、第一次世界大戦の終戦とともに、ハプスブルグ王朝の歴史に幕が引かれ、「ウィーン国立歌劇場」と改名されたが、現在もハプスブルグ家御用達の「ロブマイヤー(照明器具)」や「ゲルストナー(ビュッフエサービス)」が見受けられる。

第二次世界大戦中、空爆により正面階段等の一部を残し、崩壊したものの、1955年に現在の形に復元され、ベートーベンの「フィデリオ」で再開された。

翌56年から巨匠ヘルベルト・フォン・カラヤンが音楽監督に就任していたが、現在は小澤征爾氏が音楽監督を務めている国立歌劇場の座席数は1,709席。立見席も含めると2,000人以上の収容が可能。

オペラやバレエ公演以外にも上流階級の舞踏会「オーパンバル」の会場としても利用されている。

公演状況については、練習を除く本公演で年間300本が予定されており、視察前日にはジャコモ・プッチーニの「マノン・レスコー」、当日はジュゼッペ・ヴェルディの「仮面舞踏会」が予定されていた。

また、欧州三大オペラ歌劇場の中でもウィーン国立歌劇場の大きな魅力は世界最高峰のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏が生で聴けるということが挙げられる。

ウィーン国立歌劇場のオーケストラであるウィーン国立歌劇場管弦楽団の団員のうち、入団を認められた者がウィーン・フィルハーモニー管弦楽団を構成しており、音楽界ではベルリン・フィルと並ぶ双璧と言われている。

昨年にはミュンヘン・ザクセンホールでの公演が行なわれたが、大変好評で即日完売の状態であった。

入場料はS席が€192、日本円で23,000円（€1=120円換算）となるが、昨年の「ウィーン国立歌劇場日本公演2008」は、S席65,000円であり、やはり本場での割安感があった。

また、前述の日本公演の最低料金は12,000円のエコノミー席であったが、現地では、立見席€20の低廉な価格設定がなされ、庶民も手軽に楽しめる娯楽になっている。

オペラの場合、大規模なステージを要するが、同国立歌劇場の場合、奥行き50m（奥舞台を含む）を有し、同時に3つの構成が可能な舞台装置を備えている。

連日の公演が行なわれる場合、午前中に搬出入が同時に行なわれており、当日の視察中も舞台上では作業が行なわれていたが、職人の手際の良さが目を引いた。

正面脇の入口から入ると第二次世界大戦の空襲から免れた正面階段は荘厳な雰囲気を出しているが、入口付近には日本のトヨタ自動車株式会社の記念碑が建てられている。

これは、同社が社会貢献活動の一つとして同歌劇場に協賛しているも

ので、公演パンフレットの中にも「レクサス」の宣伝広告が見受けられた。ロビーの片隅の展示室では、昔のプログラムや写真などを見学できる。

正面階段を上がると2階の劇場正面のベランダからリング通りを眺めることができるが、マーラーやリヒャルト・シュトラウス、カール・ベーム、カラヤンら歴代の劇場総監督の胸像もあり、過去の歴史を物語っている。



国立歌劇場 1階客席から



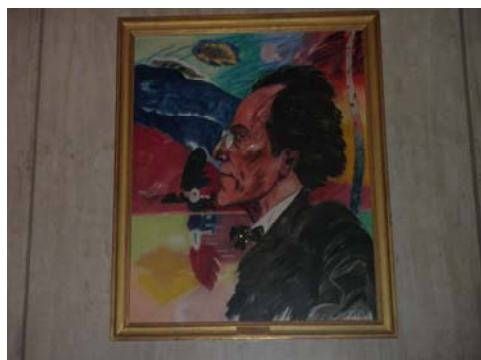
国立歌劇場ステージから



国立歌劇場（舞台）



国立歌劇場（休憩所）



国立歌劇場（グスタフ・マーラー肖像画）

【総括】

現在、オーストリアの観光客数は年間2,000万人とも言われているが、そのほとんどが首都ウィーンの訪問客である。

その魅力は優雅な街並みとともに音楽と芸術の都としての様々な観光資源を有することが挙げられる。

欧州におけるオーストリアの歴史同様、芸術振興の面からもハプスブルグ家が大きな影響を与えている。

ハプスブルグ家は、数々の政略結婚を通じて、世界中に植民地を持つ各国の王家と姻戚関係を結んだ結果、欧州における絶対的地位を築き上げてきたが、その王朝の繁栄と安定した基盤が教育や芸術振興に力を注ぐことを可能にしたものと想像される。

ハプスブルグ王朝に歴史の幕が下ろされた後も、その地理的優位性を活かし、西欧と東欧の交差路として重要な役割を担い、東西冷戦時代も両陣営の超大国の狭間で政治的な中立政策を維持し、現在も永世中立国として立場を有していることが、この国の魅力を高め、音楽と芸術の都としての歴史を築き上げてきたものと思われる。しかし、今日においては、経済が低迷期を迎え、歴史的な岐路に立たされている。

今日も音楽の都ウィーンは、留学先としての人気も高く、約1,500人が留学をしていると言われているが、その一部にはオーストリアの経済的理由による側面があるものと推測され、近年の動向としてはニューヨークのジュリアード音楽院又はベルリンへの留学が相対的なレベルは高いとも言われている。

様々な課題を抱えつつも、その絶対的な名声は維持されていくものと思われるが、若き日のリヒャルト・シュトラウスが日々オペラ座の立見席に通い詰めたように、その名声を支えるのは庶民に身近な娯楽としての音楽と格式の高い音楽の融合である。

我が国においては、クラシック音楽の敷居は依然として高く贅沢と思われる方々もいるようだが、人心の荒廃進む今日において、人々の心を豊かにし幸せにする音楽が広く浸透していくことが国の発展に繋がるものと確信した。